

ジェルマン・ミュレールと演劇集団バラブリ

市 村 卓 彦

▶キーワード

アルザス
アルザス風刺文学
ジェルマン・ミュレール
演劇集団バラブリ

▼要 旨

ナチドイツに占領併合されたドイツ国境のフランス・アルザス地方の劇作家ジェルマン・ジャン＝ピエール・ミュレールはアルザスの現代文学史に名をとどめるだろう。ナチドイツから解放された直後のアルザスで劇団『バラブリ』を創設し、以後40年間演劇シーズンを送り、観客動員数4万人以上を数えている。彼の活動の歴史はアルザス人にとってきわめて意義深い。戦後のアルザス人のコンプレクスの抑圧を解放し、そのアイデンティティを再発見させたからである。本稿はこの劇作家・俳優としてアルザス文学史に名を止めたジェルマン・ミュレールについて取り上げたい。

1933年1月30日、政権を掌握したヒトラーはナチドイツの一党独裁を確立し、兵役義務制の復活と再軍備を宣言し、軍備を拡充するとともに、自給自足の「生活圏」を建設しようと、猛烈な侵略政策に出た。1939年6月15日、ナチドイツは宣戦布告なくポーランドに侵攻した。これに対してフランスとイギリスはドイツに宣戦を布告、ここに第二次世界大戦が始まった。ドイツ軍はポーランドを3週間で圧倒した。さらに1940年5月10日、西部戦線で大攻勢に成功し、北フランスからパリに殺到、6月14日、早くもパリは陥落した。フランス政府は休戦派が17日、ヴェルダンの英雄フィリップ・ペタンを首相とする内閣を組閣、6月22日、ペタン政府はドイツと休戦協定を結んだ。このほぼ同時期の1940年6月15日朝、ドイツ軍はアルザスに侵攻を開始、特に大きな反撃を受けることもなく6月19日午前、ストラスブールに無血入城した。その後ドイツ軍は撤退せず、事実上、アルザスを第三帝国の地方行政組織であるバーデン＝アルザス大管区に併合した。こうしてアルザスはナチドイツの占領支配のもとに置かれ自由を剥奪され魂の死を強要された。1942年8月25日はアルザス人にとって第二次世界大戦下で最悪の悲劇

の日となった。この日ナチドイツは、占領下の他国民を占領軍に強制徴募することを禁じたハーグ条約を公然とふみにじってアルザスに国防軍兵役義務制を導入したからである。開戦時フランス軍の軍服を着用して前線に向かったアルザス人将兵は、今度は強制的にドイツ国防軍に徴兵されることになったのである。

アルザスは1945年3月19日、連合国軍によって完全に解放され、フランスに復帰したが、ミュレールはアルザス解放後の1946年12月14日、劇団『バラブリ』を結成した。この劇団はアルザス人の戦時下のコンプレクスから解放させ、アルザス人のアイデンティティを再発見させるのに大いに寄与したのである。ミュレールの作品はアルザス語で書かれたことによって、アルザス人の鏡の役割を果たしたといわれる。アルザス語とアルザス文化を顕揚する独自の活動を行なった。ミュレールの作品は歴史に翻弄されるアルザス人の鬱屈した状況をユーモアをこめ、共感をもって描いた。バラブリは以後1988年まで40年間にわたって芸術的喜びを提供したのである。

I ジェルマン・ミュレールの生涯

ジェルマンはフランス・アルザス地方の首都ストラスブール市（バ＝ラン県）に、公務員の父ルイ・ミュレールLouis Mullerとラ・マルセイエーズ大通りの中央郵便局に勤務（非常勤）していた母オギュスティーヌ・ヴィレلمAugustine Wilhelm（二人は1922年春に結婚）の長男として1923年7月11日に生まれた。ミュレールが生まれて四年後、妹シモーヌが生まれている（1927年12月4日）。この当時家族の住所はルイ・アプフェル通り22番地のアパートマンである。現在は通称「ドイツ街」と呼ばれるコンタッド地区にある。町並みはシックで重厚である。彼らは家庭ではフランス語を使用した。当時のストラスブールの習慣では上層家庭は伝統的にフランス語しか使用しなかったからである。

ところでミュレール姓は、ストラスブールではパリにおけるデュボン姓と同様にきわめてありふれた名前のひとつである。この姓は市内で約3800家族を数えられよう。この劇作家の多面的存在であるジェルマンをストラスブール市民は親しみを込めて「ジェルマン」と呼んでいる。われわれも本稿では、その正しい姓名であるジェルマン・ジャン＝ピエール・ミュレール Germain Jean Pierre Mullerと呼ばず、ジェルマンとのみ呼ぶことにしたい。

このジェルマンの誕生した1923年は、ドイツ・ミュンヘンで11月8日に「ヒトラー一揆」が企てられた年だった。一揆は失敗におわり、ヒトラー（1889-1945）は逮捕され大逆罪で裁判を受けた。この公判によってナチ党の運動の解体が約束されるはずだった。しかしドイツ司法当局はヒトラーに合法的な権力奪取の道を示して、ついにはナチ党の権力掌握を可能にさせた。このときミュンヘン一揆に参加し、ヒトラー、ゲーリングらと同じランツベルク刑務所に服役して、熱狂的なヒトラー崇拜者になったのが、ロベルト・ヴァーグナーである。ヴァーグナーはのちにナチドイツが占領支配するバーデン＝アルザス大管区指導者となってアルザスの専制的支配者となるだろう。

当時ミュレール一家が居住していたストラスブールのコンタッド地区はナチドイツの対外侵略とナチの反ユダヤ主義を警戒して多数のユダヤ人がアルザスに転入しつつあり、かれらユダヤ人がもっとも多く転入した地区だった。これはジェルマンの幼年期の記憶のひとつとなって

いる。すでに戦争の兆候はストラスブールでも濃厚となっていた。

ジェルマンの幼年期を簡単に振り返っておこう。ジェルマンは篤信のカトリック家庭で育った。地元のコンタード幼稚園に入園したあと、ノートルダム修道会の小学校の第10年級に入学した。ついで1930年、リセ・クレベールの第10年級に編入学し、同じ学年を2度繰り返した。しかしこの時期はミュレールには最悪だったようである。ベルナール・ジェニーの伝記『ジェルマン』によれば、その理由を次のように述べている。

「リセ・クレベールに入学したとき、たいへんつらかった。私は、カトリックを共和国の敵とみなす完全に聖職者嫌いで反教権主義のヒステリックな本当の『ジャコビーヌ』の女教諭に出会ったのです。彼女は『アルザスを非キリスト教化する』ためにパリからやってきたといっており、私が前年にノートル・ダムの修道会の小学校で修道女の先生がたに教えられていたことを知ると、私を毛嫌いしたのです。女教諭はただ単に『坊主嫌い』であっただけでなく『篤信で知られた) アルザス人嫌い』だったのです。こうした先生はそれまでアルザスにはいませんでしたし、その後二度と現われませんでした。修道女の教え子でアルザス人だった私は女教諭の憎悪の犠牲になったのです。このとき私は七歳でした。私にいかなる責任があるのでしょうか。その歳ではその不条理な事態を理解できませんでした。不当で不寛容なものがあったのです。私はその時以来不寛容と戦ってきたのです。しかしもっと重大なことがありました。このひどい先生は私が学校に行く意欲をそぎ、勉強する意欲もなくしてしまったのです」。

Ⅱ 元老院議員の伯父の教育

このようにしてジェルマンは公教育から離れて、自宅で伯父のウジェーヌ・ミュレール Eugène Muller から「知らなければならぬことのすべてを」学んだのである。ここでこの上院議員のウジェーヌ、そのアルザス政治に足跡を遺したウジェーヌの生涯を簡単に見ておこう。

ウジェーヌは1861年8月31日にオー＝ラン県のタンの北西にある小村ランスパックに生まれた。15歳で召命、ロレーヌのモンティニーの神学校に入学したが、その神学校ではフランス語で教育されている。1886年、司祭に叙階され、故郷の教区教会で最初のミサを捧げた。ウジェーヌ神父はついでドイツのヴェルツブルクに留学し、1888年、ストラスブール大神学校教授に任命された。その後1903年、ストラスブール大学にカトリック神学部を創設した。1911年、ウジェーヌはタン＝サン＝タマラン選挙区から議員に選出された。1914年8月3日、第一次世界大戦がはじまったが、ウジェーヌにとって、この時期が政治家としてもっとも厳しく多忙な時期だった。1918年12月、ウジェーヌは新しい政党「アルザス共和人民連合（UPR）」を結成してバ＝ラン県選出の代議士となった。

しかしウジェーヌは1928年、UPRの総裁に選出されるとともに、体力的な問題のために元老院議員になった。1939年8月31日、ウジェーヌは78回目の誕生日を祝ったが、その翌日に第二次世界大戦が始まった。ストラスブールは疎開命令によって無人都市となり、ウジェーヌを含むすべての議員はパリからボルドーに移った。ウジェーヌがストラスブールに戻ることができたのは1945年の夏である。そしてウジェーヌは戦後の1948年1月14日、死去した。享年87歳。

ウジェーヌはジェルマンにモリエール、ラシーヌ、ラ・フォンテーヌなどフランス文学を教

えた。ジェルマンは10歳でモリエールの全作品を読んだという。のちにジェルマンの情熱の対象となる演劇への関心をかきたて、戯曲の書き方を教えたのはウジェーヌだった。ウジェーヌの教育の基本的原則は言語においては二言語併用主義を、文化においてはアルザス文化の擁護だった。これはのちのジェルマンのバラブリの活動姿勢と共通している。1937年はジェルマンにとってその生涯の方向を決した。「もしこの年について話さねばならないとすれば数時間かかるだろう」といっている。この年はジェルマンにとって決定的な年だったのである。この時ジェルマンは14歳だった。年に比較してぐんと年上に見えた。友人たちは18歳から20歳くらいと見ていたという。ジェルマンはこの年両親の期待に反してコンセルヴァトワール・ド・ストラスブールの演劇クラスにジャン＝ピエール・ムニエ Jean-Pierre Meunier の偽名で登録（入学試験は合格）、演劇の道を歩むことを決断したからである。しかしジェルマンは1938年、リセ・クレベールを欠席過多によって退学させられ、リセ・フュステル・ド・クーランジュに転校しなければならなかった。父親ルイは「とにかくバック（大学入学資格）に合格することだ。ミュレール家からコメディアンは出さない」とジェルマンの希望に否定的だった。ジェルマンにとってもっとも厳しい年になった。

Ⅲ 政教協約（コンコルダート）の廃止問題

ところで先の「ジャコビーヌ先生」については政教協約（コンコルダート）の廃止問題と密接な関係がある。これらの教育や宗教をめぐる経験は幼児期のジェルマンに強い影響を与え、さらにのちのジェルマンの演劇作品でジェルマン得意の風刺の対象とするだろう。この廃止騒動の経緯を簡単にふりかえっておきたい。

ジェルマンが誕生した翌年の1924年6月17日、エリオ内閣はアルザス・ロレーヌがフランスに復帰したことによって政教協約体制の廃止を打ち出した。すでにフランス内地では1905年12月9日、政教分離法を公布、政教協約を廃止していたからである。このときドイツ帝国に割譲されていたアルザス・ロレーヌにおける廃止は無論見送られていた。エリオ内閣は廃止問題は軽く克服できると考えたが、宗教問題は言語問題と同様、アルザス人の心の琴線にふれる問題であり政府の意図通りにならなかった。アルザスではフランス復帰の喜びの世論が一挙に冷まされたのである。

アルザスは政教協約の廃止に強硬に反対した。反対運動の中心的役割を果たしたのはストラスブール枢機卿司教シャルル・リュク（1919-1945）である。リュクはメッス司教区のペルト枢機卿司教と共同して、廃止反対の抗議運動を強力に展開した。リュク司教は戦闘的な書簡をアルザス各界に送り運動に結集させた。6月23日にはカトリック系の多様多岐な組織を統一する「アルザス・ロレーヌの宗教の自由と伝統を擁護する行動委員会」を設立、強力な反対運動の中核を作り上げた。ストラスブールの抗議運動は24年7月20日最高潮を迎え、ストラスブールに代議士、地方市町村議員、政財界人、教員、聖職者、在郷軍人ら五万人が集まった。結局、エリオ政府は25年1月24日、廃止の方針を撤回し、4月に辞任、パンルヴェ内閣が成立した。

ところで政教協約の廃止を断念したパリは、報復を忘れない。アルザス・ロレーヌの宗教学校にジュール・フェリー改革（教育の脱宗教化・世俗化）の厳密な適用を意図的に実施していく。この結果アルザスの教育行政はあらゆる領域で停滞し、同化政策はアルザス人に不満を喚

起させた。この不満が次第に自治主義運動を活発化させていく。これは政府の弾圧を招き不毛な「コルマル裁判」へと進むことになる。

Ⅳ 第二次世界大戦とナチドイツによるアルザス併合

1939年9月2日、ミュレール一家はペリグーに転居することになった。

ドイツとの国境地帯のアルザスでは、39年9月2日、ストラスブール市民に疎開命令が出され、ジェルマン一家はペリグーに疎開した。ドイツはアルザスを40年6月から45年3月まで、「ドイツ併合地区」とし、ドイツ領土とみなし、ナチ体制に組み込んだ。

ジェルマンは最初リセ・ド・ボルドーに入学するが、すぐにコンセルヴァトワール・ド・ボルドー（「ボルドー芸術学院」）に転校している。彼ら一家はその地でフランスの敗北、ナチドイツのアルザス占領を知り、ナチ化・ドイツ化が強行されることを知った。40年4月27日、ジェルマンはペリグーに演劇集団「ジェルマン・ムニエ座」を結成し、演劇の道へ踏み出す意欲を示すが、40年12月、家族とともにアルザスに帰還した。列車でストラスブール駅に到着すると、構内には「偉大な祖国ドイツへの帰国歓迎！」あるいは「祝！ 大ドイツへの帰還！」のスローガンが読むことができた。しかしすぐに現実を知らされる。ナチドイツのドイツ化政策によって「姓名の非フランス化」が強制され（40年8月16日）、ジェルマンは「ハンス・ゲルト・ミュレール」と改名しなければならなかった。その手順を見ておこう。「ハンス」Hansは「ジャン・ピエール」のジャンを単純にドイツ語に対応する「ハンス」としたのであるが、「ゲルト」Gertはアルザス語で、フランスの「ゴール」を意味することから自分の名前に取り入れた。この改名において若いジェルマンの密かなレジスタンスの精神を表現しているといえなくもないだろう。

41年、ジェルマンはカールスルーエ演劇アカデミーに入学し翌年、卒業した。その後、伯父が神学を学んだヴェルツブルクの市立劇場で俳優兼演出助手となった。1943年、ジェルマンは20歳になるとともに、9月1日、ドイツ国防軍に強制徴募され、バイエルン州レーゲンスブルクに配属された。

この時期すでにドイツ軍は41年11月にスターリングラードの攻撃を開始したが、ソ連軍の抗戦は頑強で、ドイツ軍は予想に反して長期戦の泥沼にひきずり込まれ、まもなく1943年2月に、ドイツ軍はソ連軍に降伏することになる。他方、ドイツ軍に入営したジェルマンの向かうところはアルザス人将兵の多くが投入された激戦のロシア戦線だったろう。1943年3月、ジェルマンは父が逮捕されたことを知らされたが、10月10日、かねてから決意していたように、ドイツ国防軍を脱走、国鉄でミュルーズに辿り着いた。そしてレジスタンス協力者によって26日、ようやくスイスに亡命、スイスでは収容所に入れられた。この脱走行為にたいしてドイツ軍は、44年9月、軍法会議でジェルマンに死刑判決を下している。

1943年3月27日、父ルイはゲシュタポに逮捕され、ケール刑務所に収監された。逮捕理由は現在でも明確ではない。以下はその理由の推測である。ルイは文化財・貴重美術遺産の管理を担当していた。それらは危急存亡の場合、盗難・壊滅から保護しなければならない。ルイはこの保管作業をやりとげ、美術品をナチドイツの目の届かないところに隠匿したのである。この周到な作業に対してドイツの美術品・文化財接收担当課長が不快感を抱き、腹いせにルイを逮

捕させたといわれている。ルイは最初はストラスブールのライン川対岸のケール刑務所に2週間収監され、ついで悪名高いシルメック強制収容所に移送された。釈放されたのは2ヵ月後の5月28日である。

V 戦後のアルザスとジェルマンの『バラブリ』の創設

44年9月、連合国軍のアルザス解放作戦が開始され、一部部隊がスイス国境のライン川まで進軍すると、ジェルマンはその部隊に志願して参戦した。そして部隊とともにミュルーズにもどり、ミュルーズで動員を解除されたため、すぐにストラスブールに戻って、放送業務に従事した。1945年3月、43年兵として召集され、ストラスブール通信隊（第18大隊）で兵役につきがまもなくドイツ軍の無条件降伏によって、動員は解除された。

アルザス解放直後の1946年12月14日、23歳のジェルマンは放送の仕事を通して知ったレモン・ヴォジェル Raymond Vogel と一緒に劇団『バラブリ』BARABLI を創設した。バラブリは諷刺的・文学的キャバレである。「キャバレ」は「ナイトクラブ、レストランシアター、居酒屋、酒場」である（『小学館・ロベール仏和大辞典』）。

「バラブリ」の名前の由来は大変アルザス的である。ジェルマンは簡潔な名称にしたいと考えたようである。そしてそれはまたドイツ語・フランス語、アルザス語に共通した名称であればいいとも考えた。戦時中の捕虜収容所のエピソードがジェルマンに気に入ったようである。それはアルザス人、フランス人、ドイツ人を識別するさい、「雨傘」を示して「これはなにか」と問い、「パラプリュイ」と答えればフランス人で、「レーゲンシルム」と答えればドイツ人であり、「バラブリ」（この語は事実アルザス語である）と答えればアルザス人であるというエピソードに由来するものだった。

1946年、ジェルマン・ミュレールによって創設されたバラブリのスタイルは、純粋な演劇集団であるよりも政治的・諷刺的・大衆的な寸劇「キャバレ」（スイスやドイツでは「カバレット」という）である。さらに特徴的なことはこれをアルザス語で上演したところにあったのである。

ジェルマンは演劇の道の第一歩をアルザス語で踏み出そうとしていたが、この時期、フランス政府もドイツ語の排除を意図し、できうればアルザス語を一挙に消滅させ、フランス語教育を積極的に推進する意向だった。たとえば1945年3月6日号の『アルザス解放』紙には、「フランス語を話すのは粋だ」（«c'est chic de parler français»）の記事が発表されて以来、この標語のポスターがアルザス全県のいたるところに貼りだされた。さらにまた「昨日はドイツ人、今日はフランス人、さあフランス語を話そう」（“Gescht Ditsch hit Franzeesch.... parlons donc français”）の標語がアルザス中に燎原の火のように広がったのである。

ところでこの後者の標語はフランス革命の恐怖政治の時期の共和国2年ブリュメール25日に、サン＝ジュストとルバによってストラスブールに布告された声明と共通している。すなわち「人民代表声明、ストラスブール市民はドイツ的衣裳を捨てさるよう勧告する。なぜなら市民の心はフランス人のこころだからである。在ライン軍人民代表サン＝ジュスト、ルバ」。だがサン＝ジュストとルバの真意は服装にあるのではなく、すぐに明確になる。すなわち彼らの声明の攻撃対象は言語にあった。二人は1793年10月21日、「フランス語教育を規定する公教育改

革命」を布告、12月19日には「バ＝ラン県のすべての市町村（コミューン）ないし小郡（カントン）にフランス語の無料学校を設立する命令」をだし、国家語の統一の必要性を強調したのである。しかし彼らの意図は実現しなかった。なぜなら容易に推測されるように、アルザスにはフランス語教師がいなかったからである。

このナチドイツからのアルザス解放直後、フランス内地からやってきたフランス人は、先のキャンペーンがアルザス語を話すアルザス人にたいして荒唐無稽であるとすぐに気付かされたであろう。「敵国語ドイツ語」から「国家語フランス語」への移行はけっして容易なことではなく、時間が要するという事にきづかなければならなかったのである。ともあれ解放後のアルザス人は自分たちの母語はアルザス語であるよりも、フランス語であろうと望んだのは事実であろう。バラブリの演劇活動はフランス政府の意向に激しく反するものではなかった。ジェルマンはバラブリの方針に不安を抱かなかった。

バラブリのロベット劇場での最初のだしものは『ストラスブールは歌い躍動する』だった。この劇場は満足な舞台とはいえなかっただろう。観客席は最大200席で舞台は劇場のすみに設営された檀があるのみで、いつもはダンスを行なうときの楽団席である。舞台のカーテンはなく、舞台裏もなかった。舞台の奥行は3メートルとやや狭く、間口は約4・5メートルである。なお舞台装置はほぼきわめて単純で、ジャン・アルプ的なシュルレアリスムの作品に似て、実物ではなく象徴的なものになっている。ジェルマンは舞台装置の担当を、ほぼ妹シモーヌの夫リシャール・シャルにまかせていた。バラブリの初期は、俳優のセリフと演技に重点を置いたようである。

ジェルマンの意志はきわめて明確な目標をもっていたというべきであろう。ジェルマンはいう「一方にドイツ、他方にフランス、その境界にアルザス人はいる。われわれは両国の文明を結びつける役割をもっている。永続的な戦争の恐怖のもとで生きられない。アルザス人はその源泉となったゲルマン文化の支えなくして、また1681年以来のフランス文化の支えなくして生きられない。私は演劇をとおして平和のために献身したい。そのための（フランス政府の）助力、まず財政支援と活動の認可がほしい」と。この願いは知事にも認められ、ジェルマンの演劇活動に対する妨害はなかったのである。

バラブリの初公演『ストラスブールは歌い躍動する』は画期的な成功を収めた。

「あちらにいた人たち！

あのむこうにいたひとたち！

そして今アルザスにもどったひとたち！

あそこにとどまっていたらだろうひとたち！

コラボ（ドイツ人への協力者）だったひとたち！

コラボではなかったひとたち！

ナチ親衛隊に入隊するには年少すぎたひとたち！

とはいえナチ親衛隊入隊者に対して怒っている人たち！

あの状況を切り抜けるために、SIEG（ジーク：勝利）とかHEIL（ハイル・ヒトラー：ヒトラー万歳）とかを叫んだ人に！」

これらのニュアンスにみち、微妙なセリフの連続に対する観客の反応は拔群によかったといわれる。ジェルマンは以上のようなせりふをフランス語であるいはアルザス語で表現しふたつ

の言語が渾然となって舞台にあふれたのである。こうしてバラブリは一挙にストラスブール市民に受け入れられることになった。

1949年3月19日、バラブリはロベット劇場で『やれやれ、あのことは話さずにおこう』を公演した。この作品は戦後の過剰なナチ協力者の粛清にたいする批判であるが、この作品によってバラブリはまさに画期的な成功を収めた。

ジェルマン・ミュレールはバラブリの公演で、アルザス語で、風刺劇、詩の朗唱、さらに喜劇とか、悲劇を交互に演じている。彼は寸劇の出し物にアルザス解放後のアルザス特有の病的な現象を喚起している。たとえばナチドイツ時代の行動に対する責任追求、粛清、オラドール事件など戦時下アルザスの特有な経験をあらいざらい話題にした。

この作品は2部11場の構成で最初は「アルザスの風刺」と呼ばれ、のちに「アルザスのトラジ＝コメディ」と命名された。この作品の舞台の背景は戦争で4年間にわたって占領下に置かれ4度のクリスマスを送った1940年から1944年までのストラスブールのある家族、おそらくはジェルマン自身の家族の苦い体験を描いている。強制疎開で中部フランスのペリゲーの村に移住させられたが、フランス語を話せないアルザス人たちは敵国のドイツ人扱いされて疎外感に襲われた。ついでナチドイツに占領支配されたアルザスに戻るが、この家族はフランスに共感を抱いていたため、アルザスではナチの迫害に苦しまねばならなかった。アルザス人はドイツの支配下におかれた人々と、フランスを選択した人々との間に引き裂かれる不条理な経験を強いられたのである。ジェルマンはアルザス文化、アルザス語を擁護し、二言語併用主義を顕揚したが、このこの作品を観たものにとって、心理的な抑圧から解放されたのである。アルザス人はジェルマン・ミュレールの作品になぐさめられたのである。

この劇団はアルザス語で演劇活動をおこなうとともに、アルザス文化を擁護する独自の活動を行なって多数のアルザス人の支持を得た。なぜならバラブリにおけるジェルマンの作品は、歴史に翻弄されるアルザス人の鬱屈した状況をユーモアを込め、共感をもって描いているからである。だがその姿勢は単純なものではなかった。ジェルマンはいう「まずもってアルザス人であらねばならない。そのためにはすべてにたいして開放的であらねばならない。フランスにたいしてと同時にドイツにたいしても。地方主義は自閉することではない。逆である。フランス内地のフランス人はアルザスを豊かにするために来ている。彼らは彼らの家に来ているのだ。アルザス人も例外なくフランス語を話すことが大切だ。たとえつたないフランス語であれ、フランス語を話すべきである」と。

バラブリは以後1988年までの約40年間にわたって芸術的喜びを提供した。

1959年、ジェルマンはアルザス屈指の政治家ピエール・フリムランがストラスブール市長に選出されたときフリムランに推挙されて市議員選挙に立候補して当選し、以後1989年まで5期30年議員生活を送っている。ジェルマンはその当初から文化担当助役に任命され、フリムランとその後継市長マルセル・リュドロフの市政に参画した。しかし1978年に最初の脳梗塞を発症した。不運にもその後1980年、88年と繰り返し脳梗塞を発症したことは晩年のジェルマンの健康を危惧させる不安な毎日だった。1988年、ジェルマンはストラスブール市開都2000年記念祭の企画を実現したのが最後の仕事となった。1994年10月10日、その生涯を閉じた。

Ⅵ アルザス風刺文学の伝統

ここで「風刺」とは「遠回しに社会・人物の欠陥や罪惡を批判すること。それとなくそしること」(『広辞苑』)であり、あるいは「他のことにかこつけるなどして、社会や人物のあり方を批判的・嘲笑的に言い表すこと」である(『大辞林』)。あるいはまた「皮肉、当てこすり。反語的手法をもって社会や時代の欠陥、不合理を批評したり、嘲笑非難したりすること」である。アルザスの作家は風刺においてその本来的な才能を開花させ、また適切な表現を発見したように思われる。アルザスの「偉大な世紀」と呼ばれた14世紀から現代のジェルマン・ミュレールにいたるアルザス風刺文学の伝統を振り返っておこう。

1 ジャン・ガイラー・ド・カイザスベルグ (1445～1510)

アルザスでは一四世紀の人文主義(ユマニスム)以来の風刺文学の伝統がある。その先駆者はアルザス人文主義の第一世代と呼びうるジャン・ガイラー・ド・カイザスベルグである。ガイラーは1445年にスイスのシャフハウゼンに生まれた。幼児期に裁判所書記だった父が狩猟中に事故死したため、アルザスのカイザスベルグの富裕な市民だった祖父母のもとで養育された。1460年、設立まもないフライブルク＝イム＝ブライスガウ大学に学び、65年若くして同じ大学の学芸学部で哲学を教えた。ついで聖職者の道を選択して神学を学び、70年司祭に叙階された。71年、バーゼル大学に学び、神学博士号を取得したが、この時期に『阿呆船』の作家ブラントと友人になっている。ガイラーは哲学者になる意志はなく司牧司祭であろうと望んだ。そしてそのための最適な仕事として説教師になろうと望んだ。ストラスブール市参事会はガイラーを1478年、大聖堂の説教師として招いた。ガイラーの説教は信仰生活の内面性を深めることを強調した。悪徳、悪癖、愚行を厳しく批判した。その矛先は貴族から一般市民まで区別することなく批判した。ガイラーの説教はストラスブール市民の評判を呼び、きわめて多数の聴衆が集まった。彼自身の性格は情熱的で悲観的だった。まずもって道徳的であり、これはアルザス的な性格と見られている。ことばの天才ガイラーの説教がアルザス人に絶大な人気をえたのは逆にいえばアルザス人の気質を物語る。機知、冗談、ジョークにたいする好み、とくに辛辣な嫌味を含んだ攻撃的機知、すなわち風刺にたいする好みがあることがわかる。風刺は反逆の精神、激変にある精神にはけ口を与え、ストレスを解消させる。風刺から生まれる笑いは、多くは暗いユーモアを生む。ドイツではGalgenhumor(絞首台のユーモア)という言葉が使用されることもある。ガイラーは宗教改革者であるよりも宗教的弊害の改革を望んだ。

2 セバスティアン・ブラント (1457/58～1521)

ガイラーの友人でストラスブール生まれのセバスティアン・ブラントは文学史上最初の文学的傑作となった作品、風刺詩集『阿呆船』(1494)を出版している。ブラントは「15世紀末のドイツ最大の風刺作家」である(森田安一、『ルターの首引き猫』、出版社、発行年、p.215)。『阿呆船』は出版後、短期間のうちにさまざまな言語に翻訳されたため、一挙に有名となり、西ヨーロッパで最初のベストセラー作品となった。作品は約7000行の風刺詩で、序詩と112章から構成される。各章は冒頭に要旨を3行ないし4行の詩句で掲げ、木版画挿絵と表題、そし

て本論となる45行の詩句からなる。作品の意図と目的は「まえがき」につぎのように記されている。「本書は世に裨益するよう、英知、理性、そして良風を教え、勧め、広めるためにまたあらゆる身分階級の人の痴呆、盲目、迷誤、愚鈍を笑い、いましめるために、粉骨碎身、真摯な努力をもってバーゼルにおいて編集されたものである」。ブラントの風刺は人間の愚かさに向けられ、皮肉の痛烈さ、そのブラックユーモアは痛快である。

3 トーマス・ムルナー (1475～1537)

さらに風刺文学に含めることができるのは、宗教改革でカトリック側からルターに論戦を挑んだフランシスコ会士トーマス・ムルナー(1475-1537)である。ムルナーもやはりオベルネに生まれた特異なアルザス人である。作品としてブラントの『阿呆船』に触発されて書いた長編風刺詩『阿呆被い』がある。この作品は「阿呆の痴態を通じて社会の悪徳・弊害・人間の愚行・狂態をえがいている」(森田安一)。さらにその同工異曲の作品と見てよい『無頼ツンフト(組合)』(ともに1512年)を書いた。1513年、ムルナーはストラスブールの修道院長に任命された。しかし翌年ムルナーの専制的支配と修道院の公金流用を理由に修道院長を解任される。ムルナーは同僚修道士の自分に対する怨恨による迫害であると反駁したが結論はかわらなかった。そしてムルナーは自分を解任した連中に対する報復を忘れなかった。ストラスブールを皮肉った風刺詩『シュヴィンデルスハイムの水車小屋』(1515)がある。ストラスブールは「シュヴィンデル(欺瞞)」によって支配されていると痛烈に批判している。

4 ジャン・フィシャルト (1546～1590)

さらに16世紀の作家、ストラスブールに生まれたジャン・フィシャルトに風刺作品がある。この熱烈なプロテスタント作家は「カトリック」をきびしく批判して多くのパンフレットを発表しており、そのうちの『後衛あるいは灰色カラス』(1569?)では宗教改革の必然性を擁護し、カトリック批判に情熱を込めている。司祭の独身制に異義を提起し、聖職者の華美な生活を皮肉り嘲笑し、教皇の生活をグロテスクに描いて風刺した。フィシャルトこそフランスの作家フランソワ・ラブレーの最初の、かつ最高の読者であるといつてよいだろう。

5 ジャン＝ミッシェル・モシェロッシュ (1601～1669)

さらにまた17世紀の作家ジャン＝ミッシェル・モシェロッシュがいる。ストラスブールのライン川対岸のヴィルシュテットに生まれた。風刺小説『フィランデル・フォン・ジッテヴァルトの夢想』(1650)がある。モシェロッシュは三十年戦争の苦い体験から作品を生産した戦中派である。彼の作品を読むとアルザスの状況がよくわかる。そしてまさに三十年戦争を終決させたあとのフランス文化の影響に対する皮肉を込めた作品となっている。『フィランデル・フォン・ジッテヴァルトの夢想』でフィランデルは新しい世代としてフランスの影響を受けている。このフィランデルのフランス的な服装、髪型モードに、ゲルマン文化を対置させて皮肉った作品である。

6 ギュスターヴ・ストースコフ (1868～1944)

17世紀から20世紀の現代に飛ぶが、アルザス風刺文学で現代作家のひとりストースコフがい

る。彼はアルザスがドイツ帝国に割譲されたことに抗議の意志を表現するためアルザス語で文学活動に専念したアルザス語文学派の中心的作家である。ストースコフはブリュマットに生まれ、画家をこころざしパリとミュンヘンで学んだ。肖像画を得意としたが、同時に優れた詩を書いた。だがストースコフの才能は詩人、芸術家、音楽家を集め芸術運動を展開することにあったといえる。彼は芸術家グループ「クンシュターフェ(芸術の大鍋)」を結成してアルザス語文学を高揚させ、アルザス文化運動をととしてドイツ支配に翻弄され自信を喪失した人々にアルザス精神を再発見させた。彼はアルザス語演劇の活動を構想して、1898年2月、「ストラスブール・アルザス劇団」を創設してアルザス語によって演劇を上演している。ストースコフは喜劇『村長殿』(1898)を書いているがこれは政治的風刺をからませ、他方ドイツ人とフランス人を登場させアルザスのなかの異邦人について風刺している。この作品はたいへんな成功を収めアルザスで200回以上にわたって上演された。ストースコフはアルザス人の伝統、気質、行動様式を十分に理解して見事なアルザス語を駆使したことにあった。

このようなアルザス語の風刺文学の伝統を見ると、アルザス語に風刺の靈感があるように思われる。

以上のストースコフ、さらにアルザス風刺文学の伝統にジェルマン・ミュレールを位置付けることができよう。ジェルマンの作品はアルザス語の土壌と不可分であろう。ジェルマンの『バラブリ』は独仏の間で翻弄されたアルザス人を、その都度その都度の体制の変化、さらに言語の変化に順応しつつ、現実主義的で生きる知恵とユーモアを失わない人々を共感をもって描いている。ところで現代アルザス語も生きていることに注意しなければならない。第二次世界大戦後のアルザスのフランス復帰以降、アルザスにおけるフランス語教育はすでに半世紀を越えている。アルザス語を十分に理解し、話すことができるアルザス人は加速度的に減少している。はたしてアルザス語に将来はあるのかとさえ問われている。(とはいえある特定の言語がある言語圏で話されなくなる事態が生じることがあるとしても、これは同時にある特定の言語がある言語圏の構成員によって一斉に話される事態が生じることがありえないこともないので「言語の消滅」について外国人が予言めいたことを指摘するのはそれほど有意義とはいえないだろう。

ところでアルザス人言語学者はつぎのように指摘している。「アルザス語は、間違いなくフランス語の影響のもとにあって、主格と対格とが格語尾によって区別される「体系」(ジェルマン的「体系」)から、語順によって区別される別の「体系」(フランス的「体系」)へとゆっくりと移行していった」と(Jean-Claude BELTZUNG, *Vers une syntaxe du japonais: structure de l'énoncé*, UERCAO de Paris VII, 1977.)。

われわれ外国人にとってアルザス語に取り組むことは幾多の困難をともなうだろう。しかしジェルマンの作品はアルザス人の心性、風儀を理解するためにきわめて適切なテキストであり、今後さらに検討分析される必要がある。

参考文献

市村卓彦『アルザス文化史』人文書院、2002.

Bernard Jenny, *Germain*, Jérôme Do Bentzinger Editeur, 1997.